

神長官守矢史料館のしおり

目次

第一部 守矢神長家のお話し……………(守矢早苗)…2

第二部 展示品の解説

- | | | |
|----|----------------|-----------------|
| 1 | 薙鎌…………… | (宮坂光昭)…12 |
| 2 | 御頭祭復元…………… | (藤森照信)(宮坂光昭)…14 |
| 3 | サナギ鈴…………… | (宮坂光昭)…24 |
| 4 | 鉄鈴…………… | (宮坂光昭)…26 |
| 5 | 鹿食免…………… | (藤森 明)…27 |
| 6 | 守矢文書…………… | (竹村美幸)…29 |
| 7 | 上社古図…………… | (藤森 明)…35 |
| 8 | 大祝即位の化粧道具…………… | (藤森 明)…37 |
| 9 | 十角重箱…………… | (藤森 明)…38 |
| 10 | 参考品…………… | (宮坂光昭)…40 |

第一部 守矢神長家のお話し

守矢 早苗

七十六代守矢実久に至るまで、神長守矢は、一子相伝の口伝により、歴史を伝えてきたと言われます。七十七代の祖父真幸も一部、口伝によりご祈禱などを伝授されています。祖父の遺言により七十八代を継承いたしました私自身に至りましては、特にこれだけはと遺されることもなく終ってしまいました。しかし、祖先がしてきたように口碑などにより知りえるだけの神長家に関わるおはなしを伝えることが、せめてもの私の義務であると考え、述べてみます。

谷市川岸三沢」と洩矢大明神（同市川岸橋原）が、天竜川をはさんで対岸にまつられており、藤島明神の藤の木はその時の藤蔓が根付いたものといえますし、洩矢大明神の祠は、現在、守矢家の氏神様の祠ということになっています。

一子相伝で先々代の守矢実久まで口伝えされ、実久がはじめて文字化した「神長守矢氏系譜」（p1参照）によりますと、この洩矢神が守矢家の祖先神と伝えられ、私でもって七十八代の生命のつらなりとなっております。今でも、洩矢神の息づかいが聞こえてくるようにさえ思われます。

口碑によりますと、その頃、稲作以前の諏訪盆地には、洩矢の長者の他に、蟹河原の長者、佐久良の長者、須賀の長者、五十集の長者、武居の長者、武居会美酒、武居大友主などが住んでいたそうです。

さて、出雲から侵入した建御名方命は諏訪大明神となり、ここに現在の諏訪大社のはじまりがあります。このようにして諏訪の地は中央とつながり稲作以後の新しい

1 洩矢神からの生命のつらなり

諏訪盆地には、『古事記』に書かれた出雲の国の国譲神話とは別にもうひとつの国譲神話がいい伝えられています。そのことは、室町時代初期に編まれました『諏方大明神画詞』などに記されています。

それによりますと、大和朝廷による日本統一以前の話になりますが、出雲系の稲作民族を率いた建御名方命がこの盆地に侵入しました時、この地に以前から暮らしていた洩矢神を長とする先住民族が、天竜川河口に陣どって迎えうちました。建御名方命は手に藤の蔓を、洩矢神は手に鉄の輪を掲げて戦い、結局、洩矢神は負けてしまいました。その時の両方の陣地の跡には今の藤島明神（岡

時代を生きてゆくことになりましたが、しかし、先住民である洩矢の人々はけっして新しく来た出雲系の人々にしいたげられたりしたわけではありませんでした。このことは諏訪大社の体制を見ればよく分かります。建御名方命の子孫である諏訪氏が大祝という生神の位に就き、洩矢神の子孫の守矢氏が神長（のち神長官ともいう）という筆頭神官の位に就いたのでした。

大祝は、古くは成年前の幼児が即位したといわれ、また、即位に当っての神降ろしの力や、呪術によって神の声を聴いたり神に願いごとをする力は神長のみが持つとされており、こうしたことよりみまして、この地の信仰と政治の実権は守矢が持ちつづけたと考えられます。

こうして、諏訪の地には、大祝と神長による新しい体制が固まりました。こうした信仰と政治の一体化した諏訪祭政体は古代、中世と続きました。

2 ミシヤグチ様のこと

諏訪大社の祭政体はミシヤグチ神という樹や笹や石や生神・大祝に降りてくる精霊を中心に営まれます。家ではミシヤグチ様と呼んでいましたし、多くの呼び名や宛字のある神様ですが、ここではミシヤグチ神とします。そして、一年に七十五度の神事が、中世までは前宮と大祝の住む神殿、そして冬期に掘られた堅穴である御室や十間廊、八ヶ岳山麓の御射山（現・諏訪郡富士見町）で行われました。

そのミシヤグチ神の祭祀権を持っていましたのが神長であり、重要な役割としてのミシヤグチ上げやミシヤグチ降ろしの技法を駆使して祭祀をとりしきっていました。大祝の分身である童児は、内県（旧諏訪郡一帯）、外県（旧伊那郡一帯）、大県（信州一円の神氏系の代表からそれぞれ一年毎に選ばれて奉仕していました。童児たちは神長屋敷西側の現在の祈禱殿の位置にあったといわれます）精進屋の中で一定期間の籠りをした後、前宮での神

事に参加いたしました。

3 一子口伝の秘法の終り

このように守矢家は諏訪信仰とともに長い長い歴史を生きてきたのですが、明治維新によって大きな変化をこらうりました。明治五年、世襲の神官の制が廃止され、神長という職は消えます。また、明治六年には家宝であった鹿骨製の御室印や御頭お占法用具そして鏡、太刀、などが諏訪大社上社に移されました。しかし神長がミシヤグチ神の祭祀に用いた佐奈技鈴は家に残されました。そうした激変の時期に神長であった七十六代の守矢実久は、神長の祭祀が消えることを惜しみ、七十七代の真幸にその一部を伝えました。

私はさらに、次のように伝え聞いております。明治の解職に至るまで神長の神事の秘法は、真夜中、火の気のない祈禱殿の中で、一子相伝により「くちうつし」で伝承されました。

その内容は、
一、ミシヤグチ神祭祀法。

- 一、冬期に堅穴の御室の中で行われる神事の秘法。
 - 一、御頭祭の時に行われる御符札の秘法。
など年内神事七十五度の秘法を始め、
 - 一、大祝が前宮のカエデの樹の下で行う即位式の秘法。
 - 一、祈禱殿で行う蠶目の神事法。
 - 一、家伝の諏訪菓なる製造法。
 - 一、守矢神長の系譜。
などでした。神事の細目は『年中神事次第旧記』などに記されていますが、具体的な神事の方法につきましても、一子相伝で伝わったのです。
- しかし、それも明治の一大変動により七十六代実久でもって永遠に絶えました。
- 祖父の七十七代真幸は、ミシヤグチ神御頭占定の秘法と蠶目神事についてのみ口伝を受けたようですが、それも、七十七代で終焉を迎えました。今となっては惜しまれるばかりです。

4 神長家からの眺め

背後には赤石山脈に連なる守屋山と杖突峠等の山々を控えた扇状地に位置しており、この谷一帯は古くは武居の里と呼ばれていたそうです。この地より前方東には、八ヶ岳大扇地を一望にできます。また、前方北には、諏訪湖の沖積地を一望、対岸は、蓼科山麓の末端に直面しています。中間の平地には、宮川、上川の流れが諏訪湖に注がれています。

西方は、武居条、片山条、諏訪神社上社に続きます。また東方は、峯湛え、諏訪神社前宮に続きます。

(1) 神長屋敷内の地形

往時、広さ五千四百五十二坪を四段に構えてくね道が通り、溝水がめぐらしてありました。今でもその一部がせぎと呼ばれ残っております。

御頭御社宮司総社

この神長屋敷西南最上段で、幼い頃から祖父が大事な

行事がある度に厳かに拍手を打ち、祀りごとを行っていたことが鮮明に想い出されます。それがミシヤグジ様と幼い頃から呼んできた神様であり御頭御社宮司総社であることを後に知り、祖父の何よりも大事な信仰対象であったことに納得いたしました。

その境内に湛えの木であろうと思われる梶の老木が長々とその枝を伸ばしておりました。幹は、既に空洞となり、更に折れ曲がってその古さがしのばれましたが、昨年とうとう枯れてしまいました。全く残念というほかありません。

古墳

最上級の東南の位置には、小高い丘のような場所があり、塚と呼んでいました。この塚の存在について、祖父の生前、「あの塚は、いつ頃のものですか」と問われました際、「千二百年以上前の遺物です。用明天皇の御世の我が祖先武磨君の墳墓です。」といった内容の説明をしていただくことをかすかに記憶しております。

その後、塚に行くたびに、祖先の墓という円墳の石室

を覗きこみ、古代に想いを寄せたものです。また、塚の頂上にある杉の太木に背をもたせ、眼下の諏訪盆地に流れる宮川、上川の流れや東にそびえ立つ八ヶ岳の稜線がくつきりと見える景色を好んで眺めたものです。八ヶ岳を拝す位置にありますと、神長が居を定めた意味もここに立つとうなづかれるところです。

神使精進屋敷地

明治五年前の家屋建物の図(p10参照)によりますと、現在、祈禱殿のあります位置に精進室があったようです。ここに籠り、御頭役の神使達が精進潔斎を行い、その上で前宮での神事に参加いたしました。

祈禱殿

精進屋に対し、屋敷の東側に祈禱殿がありました。昔は、屋敷と直接つながらず、少し離れて建てていたものようです。この中で真夜中、一子相伝が口伝によって行われていたことを後に知り、身がひきしまる感がいたします。しかし、現在は、祈禱殿の位置は、精進屋のあった西側に移っております。

神長屋敷

最も東側、屋敷の奥座敷十畳の間は古来、朝廷のお遣いが立ち寄ったとされる勅使の間があります。昔は、一段高くつくられた座敷でありましたが、現在は、他の部屋と同様の高さにされております。

西南側に、別火所、北西側に学問所、厩等、西に御神使屋敷があったといわれますが、それは図にも見当らず、更に以前のことであつたらうと思われれます。

郎党屋敷、参詣古道

四段地斜面の門外に一般家の子、郎党屋敷はくね道内外におき、参詣古道は更に下部にあつたとされます。今でも地番名に残っています。大道上が四段地にあたるようです。

(2) 屋敷周辺の地形

墓地I(千代の宮)

屋敷から更に西南、薬師堂近くに神長の墓地がもともとはあり、埋葬法は土葬でした。しかし諏訪頼広が分家

し、大祝職に就き、宮田渡へ住まわれました際、この地を墓地として求められ、守矢家の墓地は熊野堂へ移りました。旧廟所は千代の宮といわれ、その祠があったそうですが、今はその祠は失われています。

墓地Ⅱ（熊野堂）

慶安三年五月、重実代よりここに葬られました。そして現在に至るまで代々ここに葬られています。埋葬は土葬で行われ、先代七十七代迄続いておりましたが、祖母登里の時、時代の変化に応じ初めて火葬といたしました。

墓地Ⅲ（夏直路廟）

御柱年に亡くなった祖先は、厳しい物忌令により、この別廟に葬られました。

夏直路廟は、下馬沢川を溯り、磯並社、小袋石を右に見て少し過ぎた杖突峠の登り口にあたる位置にあります。

今でも毎年夏の終わりに村の古老とここに登り、一年の間にうつ蒼と繁茂した草を取り、お参りしています。

この別廟がなぜ夏直路と呼ばれたのかそのいわれは未だに紐解かれておりませんが、ふと思ひ出されることが

な宝であるとして、村の倉にしまわれていると聞いております。

薬師堂

屋敷の西側にあり、実頭の遺した記録『古今家談』によれば「大同年間に建立され、明治三十二年迄八百三十三年経た」と書かれております。

薬師堂建立の意味は「古記に当家遠祖洩矢神の本地は薬師如来なりと言ひ、故に古来諏訪上社瑞籬内へも安置し、且つ屋敷内へも祀りしものなり」ということです。

あります。それは、御廟の墓碑は、粗末な自然石で、それが時の流れに風化を重ね、刻まれた文字も苔むして読みとりづらくなっています。ある時その文字に興味を抱いたことがあり、読んでみますと、葬られた日付は、全て夏だったことにあります。

冬の間は、雪深く凍てついた別廟を訪れることさえ困難であったろうと思われまじし、まして、冬に葬ることは、言うまでもありません。

別廟の墓碑に刻まれた日付が全て夏であったことに驚くと同時に「夏直路」と名づけられ意味を考える手がかりになったような気がいたします。

高部村

「高部」という名称は、諏訪明神に捧げる贄鷹の鷹狩りから来ているのであらうと思われまじし。江戸末から明治期にかけての高部村の様子を七十五代実頭が描いた絵画が残っており、近年に至る迄、村の衆は、土地の境などを定める際、役所の公図よりは、絵画の方がわかり易いと扱っては協議したそうです。それは今でも村の大事

神長官守矢史料館は、多くの方々のご理解とご協力のお陰により開館することができました。守矢家の土蔵から史料館に移されました中世や近世の文書によって新しい事実が解明され、信州の厳しい自然の中で自然と共に生きた人々の祭りや心の様相が復元されますことを願ひ、家に伝わります事柄をでき得る限り記して、皆様方のご参考に供します。

守矢氏系譜

洩矢神……洩矢ノ神 守宅ノ神後ニ守田ノ神 千鹿頭ノ神 児玉彦命 八櫛ノ神 美射津彦神 大嶋辺神 安賀多彦神

宮戸守 宮田守 大須美 室居 菅崎子 深江 百隈 建隈 真野 古海 河手 小里 真坂

鷹彦(又ハ萬侶) 平雅 榎子 真勝 秀麻呂 武鷹(弟君) 種彦 守彦 麻崎子 神太磨 大進

(彦丸) 守実 清実 正真 時実 宗実 継実 直実 昌実 満実 守実 為実 兼白川祝 信実

盛実 頼実 重実 信実 重実(正実) 鎌倉末期 朝実 盛実 真頼 有実 時実 頼実(実頼) 氏実

貞実 満実 継実 戦国末 頼真 信実 重実 政真 盛真 惟実 実友 実綿 実延 実顕
 政実 義実 幸実 氏実

実久 貞幸 早苗(現当主)

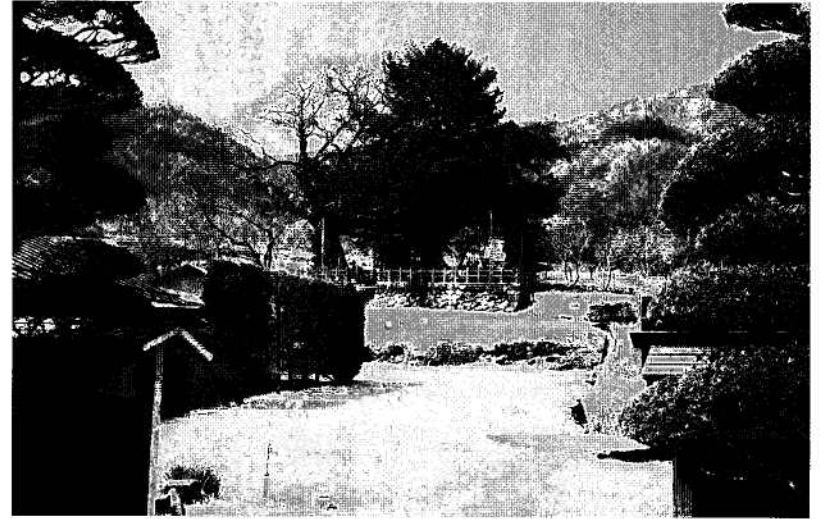


図1 御頭御社宮司(おんとうミシャグチ)総社

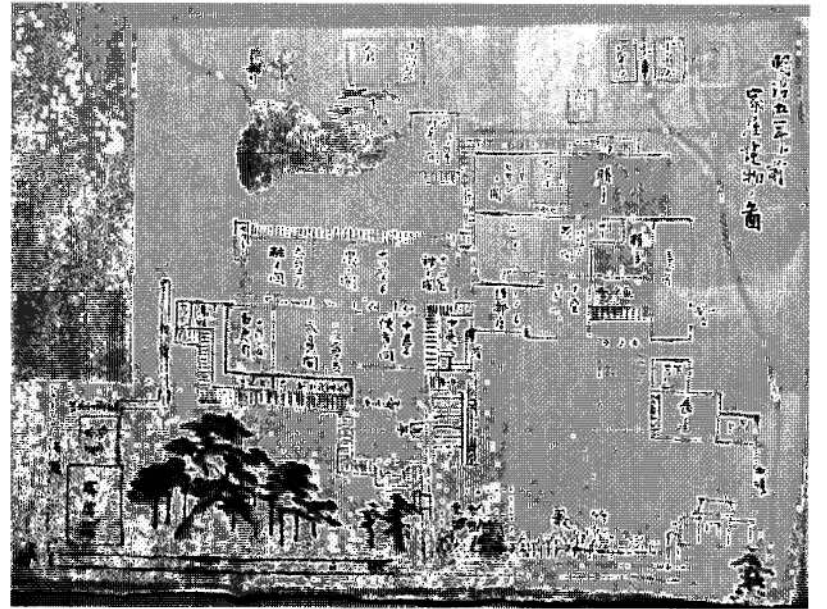


図2 明治5年以前の神長官屋敷の配置図

第二部 展示品の解説

1

薙鎌（なぎがま）

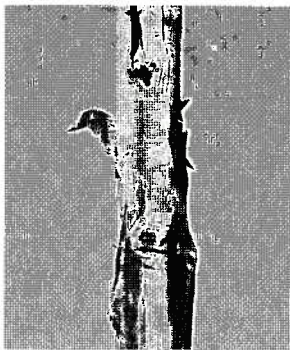


図3 薙鎌の復元

諏訪神事の御神体といわれている物に、鉄製の「薙鎌」がある。現在、諏訪神社の御分社の場合、薙鎌を御神体としてお分けしているという。

また今でも御柱祭おんばしらのとき、上社の本見立をした御柱（決定した御柱）に薙鎌を打って、御神木になったことを表示している。

さらに御柱年の前、姫川ぞいの信濃と越後国境方面、北安曇郡各地の諏訪神社に薙鎌が配布されている。

ことに北小谷村中土諏訪神社には宮司がおもむき、例祭に併せ「薙鎌祭」を行ない、一枚の薙鎌を奉納する。

この翌日、宮司一行は、糸魚川市に下り逆行して信越国境の戸土諏訪神社に至り、社の杉の大木に「薙鎌打ちの神事」を行う。

信越国境の「薙鎌打ちの神事」の起源は不明である。北安曇の千国諏訪神社には数枚の薙鎌が現存し、その中に「天長五年」の刻銘のある薙鎌がある。平安時代からの起源かは不明である。中土諏訪神社には杉の大木の幹に、御柱前年に打込まれた薙鎌が何枚も幹の中のみこまれて現存している。

薙鎌についてもっとも古い記録は、

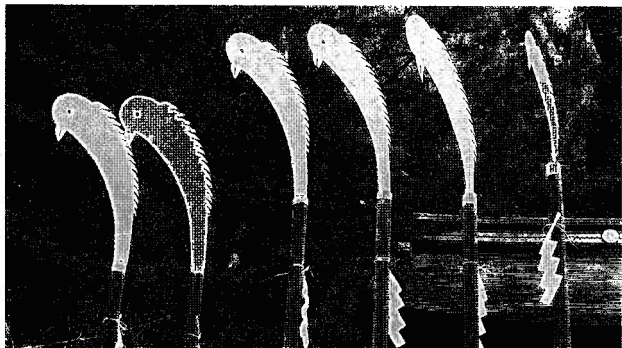


図4 現在の西祭の薙鎌

『諏方大明神画詞』で、室町時代の文書である。これには「薙鎌衆魔摧伏ノ利劔也」とある。もろもろの魔をおさえつける効力の劔といっている。江戸時代の文献では、「諏訪神の神幣に鎌」とある。古くは魔よけの劔、近世は神幣と考えていた。天正頃には御柱祭の祭具としていたとみられ、五官祝外、氏子からの奉納薙鎌が現存している。

信越国境の神社の伝世品、諏訪神社伝世品の外に、霧ヶ峰旧御射山遺跡外、信仰遺跡から出土品の例も数多い。

信越国境方面に配布された薙鎌は、下社からの薙鎌が多い。伊那谷方面には御柱に際し「御符」の配布が主で、薙鎌は少ない。その中で下伊那

坂部諏訪神社に多数みられる。

薙鎌は風害を除く呪物と考えられ、突りの秋の大敵である大風を、鎌で切って弱めようとする考え方。また陰陽五行の原理である「金克木」からの説明は、風は「木気」であり、風を制するには「金気」がよく、木に鎌を打込むとする考え方である。

薙鎌の形の原形は、平安時代の鉈な鎌（かつばらい鎌）とみられ、蛇体信仰からしだいに背に羽根状のウロコをつけたり、クチバシ状をしたり、尾端を折り曲げたりなど変形してきた。
（宮坂 光昭）

2 御頭祭復元

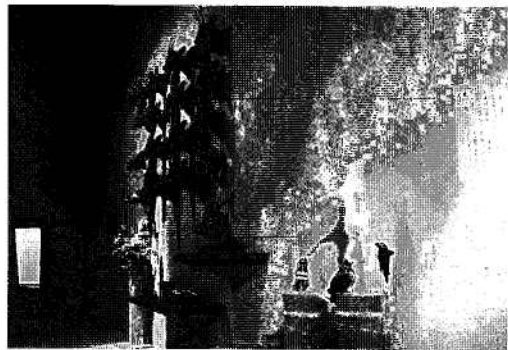


図5 御頭祭の復元展示全景

前宮十間廊での祭祀

神長守矢が司る諏訪大社上社の祭祀のうちもつとも大がかりでかつ神秘的なのは御頭祭である。ここでは長期にわたるこの祭のピークをなす前宮十間廊で行なわれる「神と人との饗宴」の供物の一部を復元し展示している。

御頭祭は春の祭りだが、それに先立って冬の祭りがある。諏訪信仰の最も奥に生きづくミシヤグチ神は、冬になると前宮に造られた御室と呼ばれる竪穴住居の中に籠る。同時に巨大な蛇体も中に入れられ、この竪穴の中で、神と人と蛇と一緒にあって御頭占、筒粥占といった冬期の重要な神事が行なわれる。

こうした神の冬籠りは春三月にな

ると終り、ミシヤグチ神は、動物たちが穴から出、植物たちが芽を吹くのと同じように、竪穴から地上にのみがえってくる。そして三月の酉の日、「神と人との饗宴」があり、その後ミシヤグチ神は地方巡行に出発することになるのだが、その祭りの様子を今から二百二十年ほど前の天明四年に見聞した菅江真澄は次のように書き残している。

「そこには（十間廊）なんと鹿の頭が七十五、真名板の上に並べられていた。その中に、耳の裂けた鹿がある。この鹿は神様が矛で獲ったものだという。上下にいずまいを正した男が二人、動物の肉を真名板にのせて持って登場する。……神に供える大きな魚、小さな魚、大きなけも

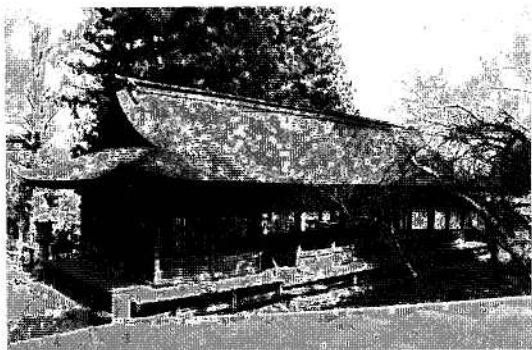


図6 前宮の十間廊

の、鳥の類など、いろいろなものごとごとく奉られ、数多くの器に組合わせて供えてある……大勢の神官が皆敷皮の上に並んでこの供物を下ろして食べる。神官はお互いに銚子で御神酒をついで回っている。……やがて（神長が）篠の束の縄をほどき、篠をばらばらにしてその上に敷き、花を供える。長殿（神長）はそのままじっとしている。その時、長さ五尺あまり幅は五寸ほどで、先のとがった柱を押し立てる。これを御杖とも御貫柱ともいう……御神といって、八歳ぐらいの子供が紅の着物を着て、この御柱にその手を添えさせられ、柱ごと人々が力を合せてかの竹の筵の上に押上げて置いた。長殿からは、四人めの下位の神官である

うか、山吹色の袂の神官が、木綿襦袢をかけて持つ。そこへ上下を着た男が藤刀というものを小さな錦の袋から取出し、抜き放って長殿に渡す。長殿がこの刀を受取り、山吹色の衣を着た神官に渡す。その藤刀を柱の上に置く。また長い縄を渡す。木綿襦袢をした例の神官が、刀の柱のてっぺんに当て、刻みつけ、さわらの枝・柳の枝・象（檉）の小枝などを例の縄で結びつける。さらに、矢も一本結びつける。また、三の枝を結ぶ。これにも矢を一本結びつける。そして、もう一本の柱も刀で同じように刻みつけ、二か所を結ぶ。こうして左右二本の柱を飾り立て、縄が残ると藤刀できっちり切り放す。また柏の枯葉に糍を盛って折箸で縫い通し、



図7 現在の御頭祭・酉の祭りの行列

二つとも糺でくつつけて柱にかけ、そして、四つともこの御柱にさす。その後、神官たちが家の中程の所に立ち、祝詞を読み上げる頃には御神楽の音が聞こえ出す。そして、拍手を打つ音が三つ聞こえて後、神楽が止んだ。例の神の子供達を桑の木の皮を縫い合せた縄で縛り上げる。その縄で縛る時、人々はただ『まず、まず』と声をかける。灯を点す。再び祝詞を読み上げた後、大紋を着た男が子供を追いかけて神前に出てくる。一方、長殿は藤つるが茂っている木の下に行き、家を造った時屋根に差した小さな刃物を八本投げられた。いよいよ祭りは最高潮となる。諏訪の国の司から使者の乗った馬が登場する。その馬の頭をめがけて人々

は物を投掛ける。しかし、この馬はとても早く走る。その馬を今度は子供達が大勢で追いかける。その後ろから例の御贄柱を肩にかついだ神官『御宝だ、御宝だ。』と言いなながら、長い鈴の様なものを五個、錦の袋に入れて木の枝にかけ、そろりそろりと走り出し、神の前庭を大きく七回回って姿を消す。そして、長殿の前庭で先に桑の木の皮で縛られてきた子供達が解き放たれ、祭りは終わった。』（菅江真澄の信濃の旅『信濃教育会出版部刊』）

以上が二百二十年ほど前の祭の様子だが、大きく二つの部分からなっている。一つは、鹿の生首七十五をはじめとするさまざま動物と春に芽吹く植物を神に献じ、それを神人

一体になって食べ饗宴を催す部分である。御頭祭の全体は農耕儀礼の要素が強いが、この部分は明らかに狩猟儀礼とわいていい。御頭祭とならぶもうひとつの諏訪大社の大がかりな神事である御射山の神事は狩猟の祭祀であり、諏訪大社は農耕以前の狩猟時代の原始的祭祀を色濃く伝えているのである。御室という堅穴住居とい鹿の生首を並べての狩猟祭祀といい、神長守矢が司る祭には遠い縄文時代のこだまが伝わっている。

こうした狩猟祭祀の部分のほかは、なかなか意味がとりにずらく、謎にみちんでいる。たとえば、おこうという紅の着物を着た子供を御贄柱とともに押し上げ、その後、立木に縄で縛りつけるのは何故か。かつてはおこ

うは殺されたと伝えられている。

また、御贄柱の頂部を神長が藤つるの皮を巻いた短刀（藤刀）で刻み付けるのは何故か。神長がミシヤグ子神の神降ろしをしてその意向をうかがって占いをする時、剣先板と呼ばれる先のがった板の頂部を短刀で刻みつけるが、それとよく似た行いである。突起物に刻みをつけ、そこにミシヤグ子神を降臨させるということである。縄文時代の石棒信仰をしのばせる行ないである。

御頭祭は原始時代からの狩猟・農耕さまざまな信仰が重なり合った複雑きわまりない祭祀であるが、ここでは、天明四年の菅江真澄のスケッチに描かれたものを復元している。

（藤森 照信）



図8 酉の祭りの行列の中の御贄柱

大御立座神事（酉の祭・御頭祭）

諏訪神社上社の春祭りのことは、『諏方大明神画詞』のなかに、「三月一撰十三ヶ日神事相続ス」とある。

現在は四月十五日に、「酉の祭・御頭祭」として行なわれている。

この祭に奉納される鹿の数が七十五頭という記録があることから、狩猟神事とする考え方もある。しかし神事内容を見ると農業神事であることは間違いない。

三月一撰とは、第一の祭のことで、十二日間の神事は、酉日を重点にして、午日から一巡している。三月中旬に酉日が三回ある場合は二酉日に行なうことになっている。

春祭の一連の神事は、きわめて呪術的なものが多く難解である。現在

もよく知られている神事をあげてみ

よう。春祭りの大御立座神事と、冬祭りの御立座神事はともに主役となるのは六人の「神使」様である。神

使は上社の生き神とされる。「大祝」の代役を行う人で、代々の大祝は幼

童で、神使様も幼童が選出されている。神使様は古くは、村代神主、神氏一族から出したが、近世は御頭郷

が出した。

神使は二人三組となり、午日に「外御立座神事」といって、上伊那郡の天竜川、三峰川合流点のあたりまで七泊八日の漕神事（廻神）に出発する。酉日には残る二組も、「内御立座神事」と、（現茅野市内）と、「大県（上諏訪・

下諏訪・岡谷方面）」の漕神事に出発する。帰着は寅日に合せている。神

事に従う神使の姿は、赤色の袖の長い袍を着た子供である。

冬祭も神使一行の三組は、「山路の寒風はげしく、吹雪は赤い袍を白くするほど」の中を出立して行く。

春祭の酉日は、前宮下の神殿（館）

と神原廊（十間廊）で重大儀式が催される。一、饗膳儀式。「禽獣の高盛、魚類の調味美を尽す」とあるように、

山海の珍味と酒で神と人が共食を行う。二、大祝の神格を授与。神使は

大祝の前に、ひざまづき、玉かづらをかけてもらい、御杖柱を受けると神がかりする。三、神意を受ける。

神長守矢氏は御杖柱を立て申立を行い、大祝は「のりと」を読むと、神使達はこれを口まねする。四、神宝の授受。神長は神宝の鉄鐸（宝鈴）

を神使の首にかけるか、御杖柱に吊

す。五、出門と神殿めぐり。神使と一族一行は、諸人に見送られて、挑

提、たいまつで昼のように明るい神原を出門し、神殿の外を三回逆廻り

して出発する。

神使一行は、三方面に旅立って、漕の場所（巨木・岩石・ミシヤグジ社）に寄って、村人を集めて、御杖

柱と鉄鐸で、農耕に先立ってミシヤグジの神を降ろして豊作祈願を請け

負う祈禱をみるとみられる。

十一月二十八日御立座神事は、春の廻神と同じ道順を廻る。豊作の御礼のための漕めぐりで、そこで諏訪神に対する御礼の貢租の取立てと、ミシヤグジ神の神上げを行うものとみられる。（宮坂 光昭）

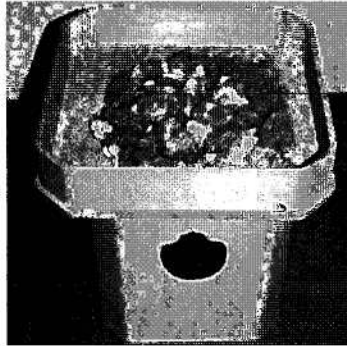


図12 脳和（のうあえ）の復元

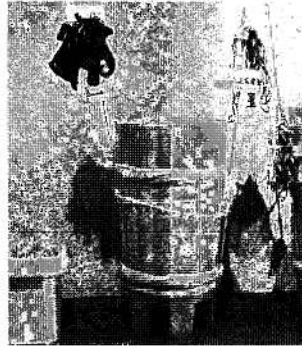


図11 焼皮の復元

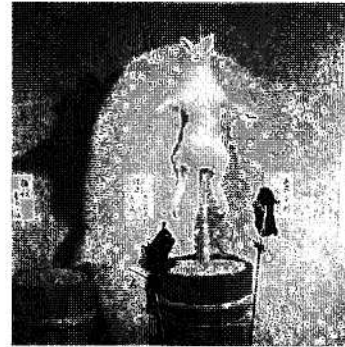


図10 兎の串刺しの復元

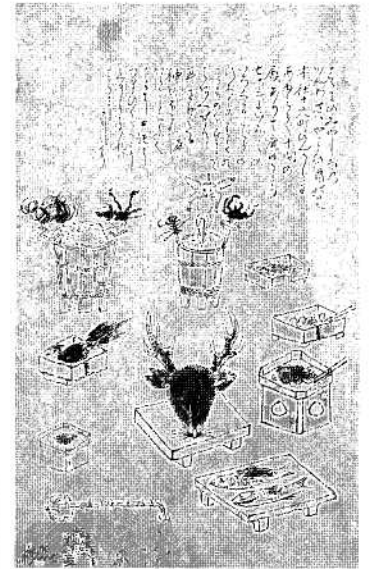


図9 菅江真澄のスケッチ

神前供物の復元（図9）

御頭祭飾り付けの復元の元となつたのがこの絵と図14の絵で、菅江真澄が天明四年（一七八四）三月六日に御頭祭・酉の祭を見物した時のスケッチである。文章も別にある。しかし、すべてを描いているわけではなく、神への動物の献げ物としてはこの他、白鷺、山鳥、フナ、ブリ、エビなどがあり、さらに列席者の前

には餅、かや、山芋などが置かれた。スケッチの精度は高いが、しかし、肉料理と榎に串で刺した奇妙な料理が何であるかは説明してない。これが何であるかについては、御頭祭の料理職であった金井氏の記録と、このスケッチと料理実験によってほぼ確定できた。

兎（図10）

野の白兎を松の棒に串刺しにしている。菅江のスケッチでは兎の耳が立ち四肢も張っているから死後間近なものである。右の串は、円盤状の汁受けが下に付けられているから動物の皮を焼いた料理と思われるが、兎の皮ではこうならず、鹿か猪だろう。左の串は、菅江の文により海草の「あらめ」であることが分かる。



図13 耳裂鹿（みみさけしか）の復元

焼皮（図11）

左右の串刺しの黒い食物について、菅江は説明していない。料理職金井氏の記録に従い、猪の頭皮を鼻頭を中心に切り裂いて焼く実験をしたところスケッチとそっくりのものが生まれた。左は鹿皮を細切にして焼いたもの。下の四角は切り餅である。

脳和（図12）

菅江のスケッチには三種の肉料理

が描かれているが解説はない。一方、料理職金井氏の記録により、「猪の皮焼き」〈脳和〉〈生鹿〉〈切兎〉〈兎煎る〉〈五臓〉が献ぜられていたことが分かる。脳和は鹿肉を茹で、別に鹿の脳味噌を紙に包んで熱湯にしばらくひたし、両者を和えたもの。生鹿と生兎は肉を煮て味付けしたものの。

耳裂鹿（図13）

神前に献ずる七十五頭の鹿の首の中にならず耳の裂けたものがあり、これは神の矛にかかったという。鹿だけでなく猪やカモシカを含めた時代もある。中世には、頭だけでなく体全部が献ぜられ、「禽獣の高盛」が現出した。

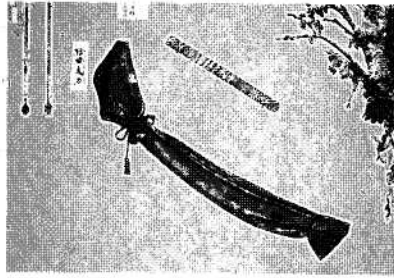


図17 藤刀（ふじがたな）と
根曲大刀（ねまがりの
たち）の復元



図16 サナギ鈴の復元

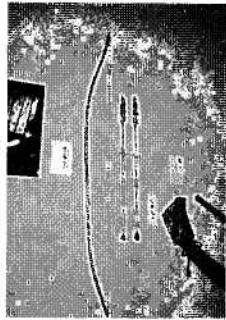


図18 重藤弓（しげとうの
ゆみ）が復元

サナギ鈴（図16）
菅江真澄のスケッチによれば木の
枝にかけているが、鈴を運ぶ神使は
この枝を手を持ったのであろう。他
の記録によれば、サナギ鈴は神使の
首にかけてたり御贄柱に取りつたり
して、神使の地域巡行の道中を運ば
れていた。

重藤弓（しげとうのゆみ）と鹿鏑
矢（しかのかぶらや）は呪術や神事
に使われた弓矢である。御頭祭の時
は、神長がこの弓矢を持って一本の
木の下に行くが、何をしているのか
人混みに隠れて見えなかった、と菅
江真澄は記している。（藤森 照信）

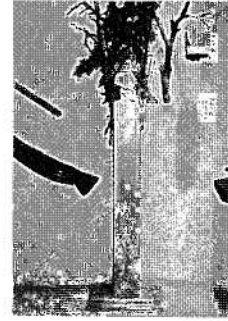


図15 御贄柱（おにえはしら）
の復元

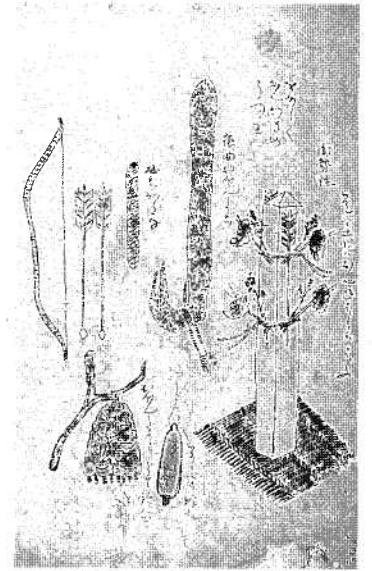


図14 菅江真澄のスケッチ

神前祭具の復原（図14）

図9とともに菅江真澄が残したス
ケッチで大館市立中央図書館に保存
され、『菅江真澄民俗図絵』内田ハチ
編・岩崎美術社刊に収載されている。
描かれているのは、御贄柱、サナ
ギ鈴、根曲大刀、藤刀、弓矢である。
弓矢については記名はないが呪術用
の「重藤弓」と「鹿鏑矢」にちが
いない。

絵はそうとう正確で、根曲大刀や
サナギ鈴の袋の独特な模様まで描き
込んでいるが、しかし、根曲大刀の
曲り方は現在上社に保存される実物
にくらべあまりに曲りすぎている。
また、サナギ鈴の袋もペロも、中の
様子を見せるため解剖的に図示した
ものと思われる。

御贄柱（図15）

御贄柱（おにえはしら・オンネバ
シラ）とも御杖ともいい、二本が並
べられた。無節の檜の角柱の上端を
とがらせ、これにヒノキ、コブシ、
ヤナギ、ジシャの枝、そして柏の葉
に麩を盛ったものを折りバシに差し
て取り付けさらに矢をつける。これ
を篠（しの）のムシロの上に置く。

藤刀（図17）

藤刀というのは、絵よりみて藤蔓
の皮を巻いた短刀と思われ、これで
神官が御贄柱の頂部に刻みをつけた。
根曲大刀は御頭祭に参加する神官
の一人が差していた。なぜそのよう
に曲っているのか由緒は全く不明で
あるが、古墳時代の蛇行剣の名残り
かもしれない。

重藤弓（図18）

3 サナギ鈴

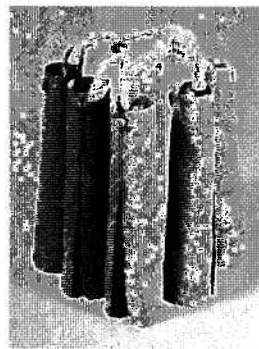


図19 サナギ鈴

この鉄鐸は鍛造した薄い鉄板を、
 截頭円錐形（メガホン形）に丸め、
 上端部に門を通し、内部に鉄の舌を
 吊し、鈴の形に作ってある。鉄鐸を
 古くは「御宝鈴」「大鈴」「御宝」あ
 るいは「佐奈伎鈴」と呼んでいた。

同形式のものが諏訪神社上社に六
 個一連で三組保管されている。これ
 は中世いらい神長守矢家の御宝とさ
 れてきたものを明治維新後、守矢家
 から上社に移管したものである。

この鉄鐸は室町時代初期に、大御
 立座神事（酉祭、御頭祭）のなか
 で、大祝の代理となる神使が、三組
 の行列を作り、御杖柱と御宝鈴を持っ
 て、廻神と称する湛（タタエ）神事
 に出発する。神使三組は内県（茅野
 方面）、大県（上諏訪から湖北）、外

県（上伊那郡内）を巡幸し、各地の
 ミシャグジ（樹木・岩石等）の地に
 おいて、人々を集めて鉄鐸を鳴らし
 て神事を行なったとみられる。

鉄鐸の使われ方に、天文四年武田
 信虎と諏訪郡主碧雲齋（頼満）の和
 議のさい、甲信国境の堺川の場合に、
 神長が持参して誓約のしるしに鳴ら
 している。御宝鈴を鳴らし「参銭金
 七」を武田方は支払っている。

鉄鐸を鳴らすのは、「誓約のしるし」
 で、礼銭の支払いをすることが判り、
 中世以前から行なわれていたとみら
 れる。神使巡幸は、各地のタタエに
 おいて、ミシャグジ神を降し、土地
 の豊饒を約束し、御礼として農産物
 の何割かを貢上する約束とみられる。
 ミシャグジ神の元で約束の鈴を鳴ら

し、違約のあるときは、ミシャグジ
 神のタタリがあると信じられてきた。

鉄鐸は、誓約（うけい）の鈴とし
 て、土地境界、戦争の和睦などのさ
 い鳴らされた。永禄四年信玄は「諏
 方上宮御宝鈴銭之事」として、上五
 貫五百文。中参貫参百文。下参貫貳
 百文と使用の礼銭を定めている。

現守矢家蔵の鉄鐸は六個一連であ
 る。いずれの鉄鐸も地肌と、銹の出
 方を見ると、上社蔵の鉄鐸よりも新
 しく思える。

守矢家ではこの鉄鐸を鉄鈴、陰陽
 石とともにミシャグジ神の三つの神
 器として扱っている。明治六年に三
 組を上社に移し、一組を残した、と
 いう。
 （宮坂 光昭）

図2 神長官守矢家蔵鉄鐸計数表

鐸番	部品							
	全長	上径	下径	厚サ	舌	門	吊環	
No. 1	18.0	2.7	4.3	0.18	10.0	有	2個	
No. 2	18.2	3.2	4.7	0.2	有	有	2個	
No. 3	18.0	2.9	4.5	0.2	有	有	2個	
No. 4	17.6	3.2	4.6	0.15	有	有	2個	
No. 5	17.9	3.5	4.6	0.12	有	有	2個	
No. 6	17.7	3.2	4.4	0.11	有	有	2個	

4 鉄 鈴

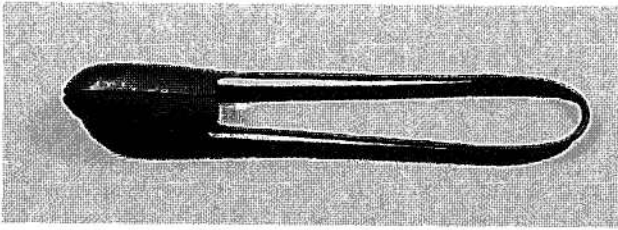


図20 鉄 鈴

長楕円形をしたハサミ具様の鉄製品である。一端を袋状に合せて作り、鉄蓋をして合せ目とともにローブけしている。袋部の先端は合せ目にそって細長く口を開け、袋内部には土製あるいは軽い石の玉が入っている。一方の柄状の部分は、幅の狭い鉄板状に切り、楕円形の輪状に曲げている。

手ずれのした、古色の鉄で、柄状の方を手に持ち、袋部を振り鳴らす鈴状の道具と考えられる。

神長官家の神事、祈禱に使用した鉄鈴であるが、他に例をみない特殊な鈴である。

ミシヤグジ神の神器の一つとして大切に扱われ、明治天皇の北陸行幸の折には、運ばれて天覧に供された

表3 神長官守矢家蔵鉄鈴計数表

全長	20.1cm
柄長	14.3
袋長	5.8
袋部径	2.4 × 2.8
柄幅	1.0
柄厚	0.18 ~ 0.2
玉	灰白色小玉。土玉又は軽石

5 鹿 食 免

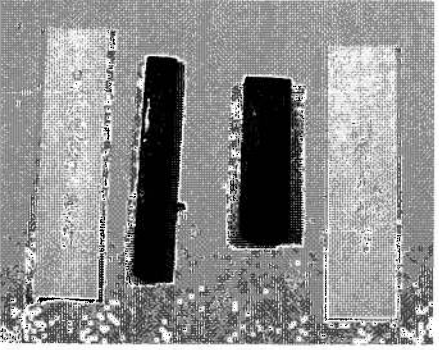


図21 鹿食免の版木とお札(ふだ)

諏訪神社では、古来より狩猟が大切な祭事とされ、その費には鹿・猪が供された。

年中四度の御狩神事は有名で、八ヶ岳南麓の裾野でくり広げられる御狩祭には、各地からさまざまな階層の人が集まってきて、かなり長期にわたって盛大に行われていたようである。しかし、仏教の浸透や幕府の禁制等で、しだいに殺生したり、肉食する風習を忌むようになって、狩猟神事も少なくなっていくが、諏訪神社は別であった。

建暦二年(一一二二)に幕府は諸国の守護地頭に命じて、全国の鷹狩を禁じているのに、諏訪神社の御贄鷹のみは除外するという異例な措置で保護していた。

また、鉄砲打ちなど猟師たちは、「諏訪講」というのをつくって諏訪信仰を行い、唱える祭文のなかに、諏訪明神の名や「諏訪明神の四句の偈」をもって、「罰除け」にしていた。

それは、「業尽有情・雖放生、故宿人身、同証仏果」というもので、室町時代のはじめに諏訪円忠が著した有名な『諏方大明神画詞』にもものっている呪文である。

むずかしい文句であるが、つまり、寿命の尽きた生物は放しておいても死ぬのであるから、むしろ人間に食べさせてもらって、その縁で極楽往生させてもらおうのが一番よい、という意味であろう。

仏教の影響をうけて、慈悲と殺生を両立させる独特の考え方に立って、

6 守矢文書



図22 文書の一部

諏訪明神にご祈禱をし、これを食べてもよいというお札を頂いてくれば許されると信じられた。

そこに発生したのが、鹿食免の御符であり、鹿食免の箸であつて、お宮からそれを頂くと、鹿や猪、その他すべての四つ足の肉を食べても罰があたらないとされたのである。

人間は、肉食による栄養分の補給も、時に必要であつたから、肉食の免罪符にあたるこの鹿食免や鹿食箸は、なかなかの人氣があつたようである。

諏訪神社への参拝者はこのお札を頂いて帰るが、一方、神社側でも毎年のように御師たちを派遣して、諸国をめぐり、地方の信徒の村々を訪ね歩き、あるいは辻説法をして、諏

訪神社の縁起物語の「甲賀三郎」伝説などを語り、この鹿食免のお札や箸を配布して、諏訪明神のご利益を説いていたといわれる。

場所によつては、鹿食免のお札を村中の人に求められるほど喜ばれ、神社にとつても、社家にとつても大きな収入源となつていた。

鹿食免を出す特権は、上社の大祝家をはじめ、神長官・祢宜大夫・権祝などの社家に限られており、明治の中頃まで発行されていたようである。
(藤森 明)

守矢文書とは、守矢家に伝えられた鎌倉初期から近代までの文書類で、そのうち中世の分が整理され、一五五点が長野県室に、五〇点が茅野市の文化財に指定されている。守矢家は諏訪大社上社の筆頭神官であつたことから、諏訪大社にかかわる重要文書の多くが伝わり、諏訪の歴史と諏訪信仰を知る上で根本史料となつている。

文書を大別すれば、大祝の職位、神事に関するもの、神使および四月花会、五月会、七月御射山祭りの頭役や造営に関するものなど諏訪上社に直接関係するもののほかに、鎌倉幕府をはじめ、武田・織田・北条氏および諏訪領主家からの下文・安堵状・祈願文・書状など、さらに守矢

家代々の書留・叙位・口宣文案などの古記録、諏方大明神画詞などとなつている。

神事に関するものでは、年内神事次第旧記、年中神事次第、嘉禎記などがあつて、一年間の当時の神事の詳細が知られる。執権北条高時の署名のある御射山祭書状では、信濃国の地頭職名とその郷名がわかる。また諏訪御符礼之古書には、四月花会・五月会・七月御射山祭りなどの祭事に頭役を奉仕した信濃国の御頭人が記されていて、室町時代の郷村の規模を知ろううえで貴重な史料である。

大祝職位事書・大祝職位奉授書留によると、神長の秘法によつて大祝の職位が神秘的に行われることがわかり、諏訪信仰の原点をうかがうこ

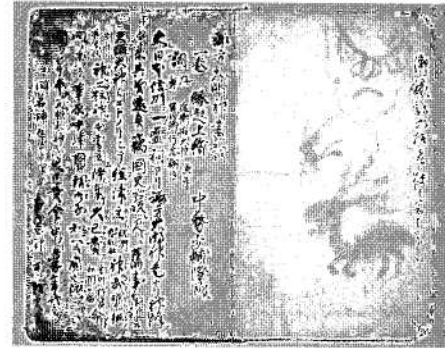


図23 諏方大明神画詞 (すわだいみようじんえことば)

とができる。

神長の書留である守矢満実書留は御頭役に関し、守矢頼真書留は事実の記録を、ともに年次をおって書きとめてあるので、諏訪の歴史を知るうえで得難い史料となっている。

諏方大明神画詞

諏方大明神画詞は、古くは諏方縁起画詞といわれ、諏訪神社の縁起書で、足利尊氏に仕えて信任の厚かった諏訪円忠の著である。この書は縁起五巻、祭事七巻からなっていて、絵巻物として編纂されていた。各巻の奥書は將軍足利尊氏が書き、表題は時の天皇后光厳帝の宸筆を賜わり、書家・画家は当代一流の名手によつ

て完成されたもので、原本が伝えられていればわが国の絵巻物として貴重なものである。

諏方大明神画詞が編纂されたのは、諏訪円忠が天竜寺造管にあたった後で、延文元年(一三五六)には一巻が完成した。円忠没後、この書は京都の諏訪家に伝えられたが、いつかその所在が不明になってしまった。現在は二、三の写本が伝えられているが、文明四年(一四七二)に文章だけ筆写した権祝本が守矢家に所蔵されている。

権祝本とよばれる画詞は、僧宗詢が高野山悉地院で師盛円法師の所持していたものを筆写したもので、美濃紙六十一枚からなっている。画詞は一巻から五巻にわたって縁起が、

諏方大明神画詞

一卷 縁起上絵 中務少輔隆盛
詞 序 近衛右大臣兼草
奥 宮内郷行忠朝臣

夫レ日本信州二一ノ靈祠アリ 諏
方大明神是ナリ 神降ノ由来其義遠
矣 竊ニ国史ノ所説ヲ見ルニ旧事本
記云天照大神ミコトノリシテ

経津主「総州香取社」神 武甕槌
ノ「常州鹿嶋社」神二柱神ヲ出雲国
エ降シ奉テ 大己貴「雲州杵築和州
三輪」命向テノ玉ハク 葦原ノ中津
国ハ我御子ノ知ラスヘキ国也 汝チ
正サニ此国ヲモテ天照太神ニ奉ラン
ヤ、大己貴命申ク吾子事代主ノ「撰
州長田社神祇官」若神ニ問テ返事申
ント申 事代主神申ク我父宣ク

六巻から十二巻にわたって祭事が書かれていたが、縁起の部分の四、五巻はあとから追加して完成されたものである。

諏訪円忠は小坂円忠ともいい、上社大祝の庶流で、はじめ鎌倉幕府に仕え、後夢窓国師の推挙で尊氏に仕え幕府の基礎を固めた。尊氏は暦応二年(一三三九)国々に安国寺を造営させたが、信濃国では国府の地や善光寺の長野としないで、諏訪の地としたのは円忠の力によることはいうまでもない。

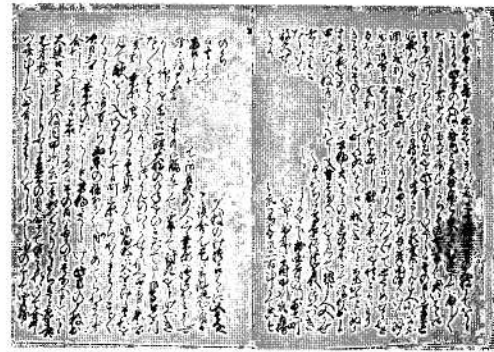


図24 守矢頼真書留

守矢頼真書留

神長官が年次式に書きとめたものに、守矢満実書留と守矢頼真書留がある。満実書留は寛正五年（一四六四）から延徳四年（一四九二）の二十八年間の記録で、とくに文明十五年の訂争といわれる上社内部の争いごとがよくわかる。

守矢頼真書留は、満実書留より下つて戦国時代の天文十一年（一五四二）から二十一年（一五五二）に至る十一年間の記録である。最初の一か年の記載事項は、武田信玄の上原城攻撃にはじまり、桑原城の落城、頼重が甲府に連行されて自害するまでの詳細が記されている。あとの十か年間は、神使御頭の日記として書き、その間にその年の諏訪の動乱などが

書き加えられている。

筆者頼真は、はじめ頼実といい永正二年（一五〇五）に生まれたから、この記録を書いたときは四〇歳代のことであった。没年は慶長二年（一五九七）九十三歳であったから、武田氏の諏訪攻略と諏訪統治、そして武田氏の滅亡を目のあたりにし、本能寺の変後諏訪頼忠が兵を挙げ、諏訪の領主に復帰する日を見届けて逝去したことになる。頼真は天文二十二年正三位に叙されているから、本書の表書には「守矢氏神長正三位神頼真御書留」と書かれている。

ここに開いてあるページは、上原城落城のところである。

（竹村 美幸）

長みねへたか馬場まで物見をいだされ候処、二千騎、二万の人数にてをしきたり候、此方の人数ハ府内弓矢・長窪弓矢くたびれにてやうくおかしき馬に乗候者共二百五十騎計、かちもの七八百にて犬いばにそなへ、つぐぐち原へもの見を此方よりいだし候、その日も暮がたに、夜かけをさせられ候て可然などと皆々申候へ共、頼重御うんすへに候間、不調候て戌刻に成候間、十日町ちんとり候、甲州陣ハ長峯・田沢へかけて陣取候、諏方衆したゝめをせらるゝ所もあり、又くつるけてしたゝめせられさる所もあり、亥刻の時分上町より敵こそ夜かけを仕候とよばわりきたり候、そのまゝかみ町いぬいば、口へ我さきにと被出、かぶ

ともぬがず其夜をあかし、二日は早朝に犬いばのこれの木まで被打出候、甲州の人数つはらへをし入そなへ、それを見て地下人又かせ者もよわきくおち候、高遠信濃守殿ハつへつきたうげしかるを下安国寺の門前大町放火せられり、事出来候、其時甲州衆百騎ばかり、之衆ハ名字衆二百計にて、只今のうち人数のけ、つゝ口はらに又そなへ候、其とか々談合候て、是被陣取候てハ、明日両口よりおてハ御名絶あるべく候、桑原へ御つぽみ候て可然と被申候処、事外御腹立にて、爰にて討死をとげべきよし仰候を、近衆一族大将の御手をひきたて申、御馬口を引たぐくわばらへ御つぽみ候て、

御うんのひらかせられ候へ由破申候条、二日亥刻、桑原へ御うつり候、其御あとにて御屋形火をかけ候、それを見て敵をし入、五日まち、十日町・上原まちほりまわりことぐくはう火候、諏方うち西東の体なか目もあてられざる次第候、

次日三日ハ桑原のたかはし口へ早朝さしかかけ候、此方の人数出合おしかへし候間、上原そなへ候、その日ハたがひそなへまで候、大熊口へ高遠人数同甲州衆一手相くわゝりはたらき候、千野入道兄弟我等ハとしよりに候間、在所の用心とてのこれ候が、いで合、あしがる廿計にて出合、からさわよりをしかへし、ゆの上にて四五騎う

7 上社古図

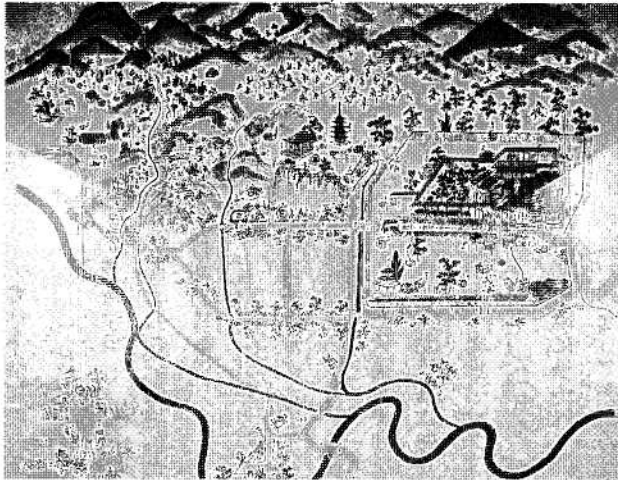


図26 上社古図

この古図は、「天正の古図」とも呼ばれ、諏訪市中洲神宮寺区の郷倉に保存されている「ボロボロ絵図」のほか、諏訪大社や権祝家にもこの類

の絵図が伝えられている。

絵図には、上社本宮や神仏習合時代の神宮寺・普賢堂・五重塔などの堂塔をはじめ、大祝の居館、神長官など五官の屋敷、上社前宮境内一帯を詳細に描き、なお御射山祭の穂屋の配置にまで及び、当時いかに諏訪神社上社を中心として栄えていたかの姿を、さながらに偲ぼせる貴重な資料となっている。

この古図の作図された時期であるが、天正時代と伝えているより新しく、少くも江戸時代初期頃のものと思われる。

まず、上社本宮からみると、御柱の位置は変わっていないが、徳川家康の寄進といわれる「四足門」が描かれているし、その延長線上には、か



図25 武田信玄定書

武田信玄定書

武田信玄の上社への願文、判物、朱印状などは、その数が多い。その一つ、ここに取りあげた永祿五年(一五六二)十月二日付、神長官にあてた寺尾郷の定書には、冒頭竜丸印が押してあって、信玄の朱印状であることがわかる。

永祿五年は、信玄が上杉謙信と川中島で戦った翌年で、以後、上野、飛騨、駿河に勢力を拡大していった。この定書は、寺尾郷に対して諏訪上社御頭役(祭祀の出費、労力を提供する役目)を勤めることを指示したものである。これと同じ定書が同じ日付で東條郷にも出ている。寺尾、東條の両郷は、川中島合戦のあった近くの地である。(竹村 美幸)

定 寺尾郷

一 諏方上宮御頭役如恒例可相勤之事
 一 於不作之地者随分量可有利用之事
 一 御頭銭之儀可為如甲州之法度之事
 右具在前
 永祿五年 戊戌十月二日
 神長官殿

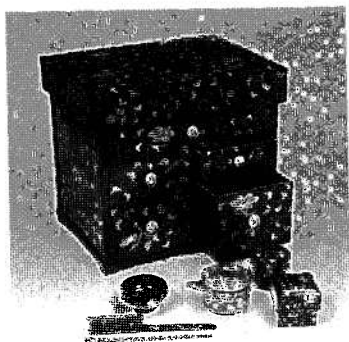


図27 大祝即位化粧道具

8

大祝即位の化粧道具

つての磐座崇拝の対象とされていた「硯石」があり、それが拝殿正面と向きを変えて、その内陣に上社のご神体として安置された「お鉄塔」が描かれている。

これは、天正十年（一五八二）の織田信忠軍による上社焼き払いの時に破壊された後、寛永八年（一六三〇）に二代藩主諏訪忠恒が復興し、再建したお鉄塔に似た独特の姿に描かれているようにみえる。

また、「大祝居館」が上社近くの宮田渡の地に描かれているが、この位置に移動してきたのは、初代藩主諏訪頼水が旧領諏訪に復帰した慶長六年（一六〇一）ころといわれており、大祝の屋敷高が宮田渡にみえてくるのは、史料的には元和五年（一六一

九）以後である。

なお、この絵図の貴重な記載では、中世に退転したといわれる磐座信仰の小袋石周辺の磯並や大祝職位後に巡幸した「上十三カ所御社参」の玉尾・穂股・瀬各明神の神々と祭儀の施設が描かれていることである。

また、前宮周辺には、現在の社殿建造物のほか、帝屋・五間廊・御左口神・舞台、それに仏教関係として大阿弥陀や薬師堂など、多彩な社寺施設のあったことがうかがわれる。しかし、すでに大祝の居館であった神殿がみえずに、神事屋にとって変っているなど、時代は確実に中世から近世に移行している姿をあらわしている絵図とみられる。

（藤森 明）

諏訪神社上社が人格神崇拝になってくると「大祝」という祭祀者を現人神として崇拝の対象にした。

神話伝承では、諏訪明神が桓武天皇の皇子有員親王に神衣を着せて、「我に体なし、祝をもって体とす」と神勅をくだし、大祝にしたのが始まりといわれている。

大祝は、代々神氏諏訪族の中から八歳〜十五歳くらいまでの童男を選び、その職に立ててきた。この大祝職に就任する継承の儀式のことを「職位」と呼び、その祭場は前宮神殿の奥の鶏冠社（柵の宮、または楓の宮ともいう）において行われた。

古い記録では、建武二年（一三三三）の『大祝職位事書』から近世の文政九年（一八二六）に至るまでの

諸記録が残されている。

それらによると、鶏冠社前の磐座の上にカヤムシロを敷き、周囲に籾の垣を立てまわした中に浄衣をまとった童子が、神長に導かれて立ち、「かなつほ石」と呼ばれる石の上に並べられた道具で化粧をし、髪を結び、そして諏訪明神の神紋である梶の葉の入った山鳩色の束帯に冠をつけて行われたという。

この儀式のいつさいは神長守矢氏が執りしきっており、神長の降ろしたミシヤグジを身につけて初めて、現人神大祝に、つまり諏訪明神になったといえることから、神長の役の大祝が重要な資料でもある。

（藤森 明）



図28 十角重箱

この重箱は器形が十角で、黒・黄・朱の各色三段にウルシで塗り分け、内部を朱塗りに仕上げ、五つ重ねになっているので、「十角五重の重箱」とも呼び、高さ38・5cm、径24・2cmほどのものである。

しかも、この重箱が収納されていた箱書に「天文十四年十二月十三日、武田晴信公より神長信実がこれを賜う」とあって、その歴史的由緒も非常に明確であるとともに、中世戦国期における漆器工芸品としての美術的価値も高く、貴重な文化財になっている。

また、この重箱に關した文書としては、守矢神平宛の「武田晴信名字書出」というのが、神長守矢家に伝えられており、それには、

「守屋神平
信実

天文十四年乙十二月十三日
〔晴信花押〕
とあって、晴信自らがサインしている。

これは、神長守矢頼真の長男で元服した守矢神平に、武田晴信（信玄）が自分の名前の信の一字を与えて、「信実」と名のらせた、いわゆる偏諱の書状というものであり、晴信なかなかの思い入れであった。

したがって、この重箱は、その祝いの引出物として武田晴信から神長守矢家に贈られたものであったことがうかがわれる。

山国甲斐の広大な山野を活用して産業を振興させるためには信玄は、

ウルシ・ミツマタ・ハゼ・木綿などの植栽を奨励して、殖産によく努めたといわれる。

山梨県東八代郡境川村寺尾の桑原家には、信玄時代の「めし漆」（御用ウルシ）の文書が残っていて、当時の主な産地や供出させた量などもわかるが、信玄はそうしたウルシを有力な輸出品としたり、織田信長などにも贈ったことがあったようである。

ともかく、甲州が信玄の時代に、ウルシ生産で屈指の産地になって盛んに輸出されていたこと、また良質のウルシを使っての漆器工芸の技術にも高い水準のものがあったことなどが、十分に推測される。

こうした背景のなかで、信玄が諏訪神社を掌握し、最も有力な社家で

あった神長守矢氏を懐柔して諏訪の統治に利用しようとした意図があったとするならば、自分の一字を神長に授けたことも、この重箱を引出物として贈ったことも、たいへん大きな意味をもつ。

まさに、この時期は信玄にとって、信濃攻略の最大の拠点となる諏訪の支配を、完全に掌握することができるかどうかが、浮沈のかかった重大な時期であっただけに、信玄は最良のウルシを用いて作らせた最高の逸品であるこの重箱を神長に贈って、ご機嫌をとったことであろう。

この美しい立派な重箱も、そうした歴史の重みと、遙かなる願いのこもった信玄の息づかいが伝わってくるようでもある。（藤森 明）



図29 銅鏡

以上が守矢家に伝えられた史料の主なものだが、そのほか守矢家との関係が明確でないために展示していない物品もあって今後の解明が待たれるが、それらのうちから銅鏡をここに紹介しておく。大切に伝えられ、明治天皇の天覧に供しているが、由縁は分からない。

図29の銅鏡は、菊花双鳥鏡とみられる平安時代以降の鏡である。

図30は、鏡背の内側部分を欠損し鏡文を欠いているが、瑞花双鳳八稜鏡とみられる平安時代の鏡である。鏡とみられるしっかりした優れた鏡である。

(宮坂 光昭)

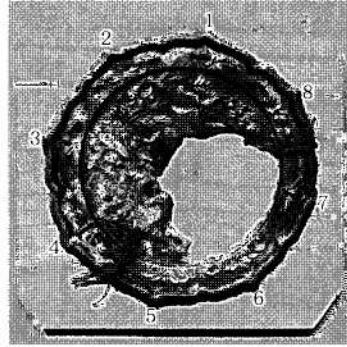


図30 銅鏡

神長官守矢史料館のしおり

平成三年三月三十一日 第一刷発行
平成十八年五月三十一日 改訂版発行

編集 茅野市神長官守矢史料館
刊行

長野県茅野市宮川高部三八九番地の一
電話 〇二六六一七三―七五六七
印刷 永明社印刷所